



無形民俗文化財

しょういんやっこ ふ

66. 正院奴振り

■指定年月日 平成28年8月24日(2016)

■執行日 9月15日

■所在地 正院町正院

■保存団体 正院奴振り保存会

須受八幡宮の秋季祭に実演される奴振り行列は、神輿の渡御を先導して町内をくまなく練り歩く。露払い役の「天狗」や「かまたき」を伴い、所々で奴振りの演舞を披露する。

江戸時代初期、境内の能舞台で神事能を上演する為に金沢から能太夫が派遣されていた。彼らを奴振りで送迎したことが始まりと伝わる。その後途絶えていたが、神輿新調を契機に、天保10年(1839)復活した。嘉永6年(1853)加賀藩13代前田齊泰が能登巡見で正院を訪れた折に奴振りで出迎えたところ、格別の賞賛を受け、継続を奨励されたという。

演者は18歳から39歳までの社会人男性30人程で構成される。奴は、鈴をつけた化粧まわしの上に「どてら」と呼ばれる女性の着物の生地で作った衣装を

着る。短刀や尺八などに赤・黄・青の三色の布を付けた「さがり」を腰に差し、両手首には紅白の紐で両端に鈴がついた「左巻」を巻く。

挟箱を担いだ2人(先箱)が「ヨー、ホーイ」と掛け声をかけて音頭取りをする。行列の片方が「シャンガ」と呼ばれる毛槍を持ち、その掛け声に「エート、ササーノサ」と応えながら進む。先箱の合図で一斉に「シャンガ」を空中に放り投げる所作が見どころである。

昭和30年代までは、須受八幡宮の東(現在のJA正院支所の辺り)に御旅所が設けられ、14日の夜に神輿が御旅所に行き、奴振りは15日そこから出発した。現在は、午後3時に境内で奴振りを奉納したあと町内を巡行し、午後9時頃、キリコが待機している境内に入宮してクライマックスを迎える。